世田谷村日記

石山修武

九月二六日

早朝、富士山聖徳寺へ。上九一色村役場、建築確認申請、夕方星の子愛児園定例。深夜帰宅。

九月二七日

朝、渡辺さん夫妻来所。住宅づくり打合わせ。総工費を全部あづかる事にした。設計施工請負いである。責任重大だ。夫妻共に私を信頼して下さっているようだから、期待を裏切らぬようにしたい。午後星の子愛児園現場、一F床コンクリート打。床にアンモナイト等を打込むのでスタッフ、学生が現場作業。檜垣、坂口以外は全く使いモノにならない。つくる本能がない。ノコギリも使えないで、建築ができるのか。明朝のコンクリート打に間に合わせるためには多分徹夜作業になるだろう。実際に実物を作ろうとするのに、取り組み方が甘いのをイヤという程知っただろう。

夕方、佐藤健、馬場昭道来宅。

ウーロン茶でソバを喰う。酒を飲まぬ日は本当に体調が良い。お茶で酔えれば、それにこした事はないのだが。佐藤健の歩く歩幅が小さくなっているのが気になる。

明朝は九時に現場行。キチンと仕事が終わっていることを望む。

九月二八日

朝、三階から眺めていると遠くの森が揺れ動いている。風が強いらしい。ガラスの屋根ごしに屋上の雑草がゆれているのが見える。

九時前稲田堤の現場へ。アンモナイトやガラス、諸々の物体の埋込みはほぼ終っていた。すぐにコンクリート打設が始まる。午後二時現場をはなれる。生がわきのコンクリートに柿渋をブチまける仕上げを実験してみたが、うまくいきそうだ。最期まで見ることはできなかったが、後は運を天に任せるしかない。現場にいると体が生々としてくるのがわかる。

夕方、建築会館へ。伊勢天武天皇、浄土寺浄土堂重源、密庵席小堀遠州、法隆寺岡倉天心、桂ブルーノタウト、万博岡本太郎、と昨年十一月から連続六回続けてきたシンポジウムの今日が最終回。浅田彰、藤森照信、隈研吾、磯崎新パネリスト、鈴木石山司会ですすめた。毎回会場は満員で、今日はことさらに若い人が多かったように思う。誰もが本能的に不安なのだろう。

九時終了。六本木中国飯店で事務局の坊城野村五十嵐を交じえ、食事。いつも磯崎さんがスポンサーになってくれているが、これは今のところ甘えるのが自然だろう。

がしかし、鈴木藤森石山も五十半端を過ぎているのだから何とかしたいもんだ。浅田彰はしかし座談、討論共に名手だなアレは。話題のつくり方、タイミング等見事だ。まわりにも気を使って、しかも使い過ぎず。余程浅田孝が仕込んだに違いない。浅田彰を見ていると、丹下健三の仕事における浅田孝の役割がどれ程のものだったのかに想いをはせざるを得ない。丹下健三という人は驚く程にそのような人間に恵まれてきたのだろう。藤森の天衣無縫振りも板に付いてきた。これからの彼の動向は興味津々である。西欧型の知識人とは別の、さりとていかにもな日本型でもない。縄文を意識しているところは岡本太郎風でもあるが、何故か大陸を、ユーラシアを想わせるところがあるのに気付いた。諏訪と大陸とは何処かで結びついているにちがいない。